

私たちの道

—— MC WAY を感じる ——

難しいと感じることの変遷

1. 入社当初

専門実務の難しさ（経験・知識不足）

- ・教科書的知識をいかにして実務レベルに落とし込むか、勘所を掴めずにもやもやしていた。
- ・部分的に実務に触れはじめるも、体系的な理解が追いついていなかった。断片でしか力になれていない歯がゆさと、この靄が晴れるときが来るのだろうか？という一抹の不安が潜んでいた。
- ・まずは、全体のつながりをつねに意識することと、先輩を模倣してでもとにかくアクションすることに集中。

2. 中期（入社1年～2年）

プロジェクトを円滑に進めることの難しさ

- ・とにかく目の前のお客さまの期待に応えること、プロジェクトを滞りなく完遂することに必死だった。
- ・壁（難しい論点・相手の性質）にぶつかる度に、ポジティブ半分・焦り半分という感覚だった。
- ・当時の自分にとっての難関プロジェクト（イレギュラーな改善支援）が思いのほか上手く運び、またその過程でお客さまとの一体感を強く感じた。そこで、それまでの焦燥感が霧散し、心が軽くなった。

3. 現在（入社3年～）

相手に最良を届けることの難しさ

- ・真に相手のためになる最善策を提示できているだろうか？その時々にあわせた最適な伝え方（言葉選び・情報量・語気）を意識できているだろうか？と、日々自問自答。
- ・とくに、瞬発的な言い回しについて、「よりよい伝え方があったのではないか」と振り返ることが多い。
- ・依然として、知識・経験面やプロジェクト進行面の壁にぶつかることもあるが、大抵のことに対して、心にゆとりをもって向き合えるようになっている。

4. 気づき

- ・難しいという感覚は尽きないが、ひとつずつハードルを越えていくことで、思考のベクトルが内から外に向いてくる。
- ・体系的な理解を深めたうえで、ひとつ突き抜けるような体験をすると、成長が急加速する。そのような機会をつくるのがリーダー・プロジェクトマネージャーの役割。